

# 歴史を重ねて50年、世界の仲間と新たなステージへ



金属労協／JCM 事務局長  
若松英幸

海外に出るたびに寂しく思うことがある。空港のロビーを飾っていた日本製のテレビは韓国製に置き換わり、免税店には中国語が溢れ、ホテルの料金は日本の倍以上する国が多い。かつて世界一と言われた東京の物価も、今やその実感はない。日経朝刊(2/28)には中国石油大手の管理職年収は平均1200万円で、タイも部長職だと日本と同等、このままでは人材確保に支障が出るとの記事が掲載されている。グローバル競争が激化する中で、日本の企業は人件費を含めてコスト管理を徹底し、生き残りを図ってきた。2014年の労使交渉が始まったが、失われた20年の轍を踏むことなく、新たな成長への転換点としなければならないと考える。かつての日本が目指した欧米のように、高賃金、高物価であっても、世界に誇り、安全で安心して暮らせる豊かな国家を造り、東南アジアをはじめとする新興国の範となるよう、国際社会での影響力強化にも注力しなければならない。

今年の5月にJCMは結成50周年の節目を迎える。国際金属労連(IMF)の窓口として発足したJCM(当時IMF-JC)は、労働運動の時代変化にあわせ、春闘の相場づくりの役割を担い、グローバルに展開する金属産業の政策・制度の取り組みを強化してきたが、連合の結成以降は役割分担の明確化と効率的な運営も視野に、運動を展開している。

そのIMFは、2012年6月に119年の歴史に幕を下ろし、化学エネルギーや繊維などのGUFと共に、世界140カ国5000万人が加盟するインダストリオ

ールを結成した。IMF 119年の歴史は、18世紀から19世紀にかけて起った産業革命、工業化の流れとともにある。1893年8月11-14日、スイスのチューリヒで開催された第1回国際金属労働者大会の「万国の金属労働者へのアピール」は興味深い。「労働者階級の子弟が、最初から物乞いやならず者だとひんしゅくを買ひ、一方で金持ちの子弟らが生まれながらに富裕層の後継者とされるのは正当なのか? この格差一つだけでも、労働者階級を覚醒させ、この屈辱的な束縛から自らを解き放つべく立ち上がり、天与の人権のために闘う勇気に火をつけるのだ」「機械を生産する諸君たち労働者が、年々、失業者の群れに加わり、失業の故に現役労働者を低賃金の犠牲に直面させている状況がある。諸君こそ労働組合組織の前進を主導する、偉大にして神聖な役割を担っている!同志諸君、諸君の子弟が父親の行動を、誇りを持って振り返ることができるよう、自由で断固たる行動をとろうではないか!合言葉は“前へ、さらに前へ!”である。組織を拡大しよう!組織は力なのだ!」と記されている。1900年、パリで開いた第3回大会では、「8時間労働制の確立」、「組織化支援」、「国境を越えて事業展開し、またはロックアウトで脅迫する使用者に対して採るべき超国家的な産業行動他、連帯基金、スト破り対策」、「労働条件の上位準化」、などの議題が盛り込まれている。

労働者と職場に根差した労働運動の根底は、今と何ら変わらないが、インダ

ストリアル結成は、まさにグローバルな課題、「底辺への競争」「不安定雇用」「社会格差」などに対抗したグローバルな労働運動の強化が急務となっている中での、必然的な動きであった。ボーダレスに資本が移動するとき、労働組合もまたボーダレスに対応する必要がある。もはや国内完結型、企業内完結型の労働運動ではおさまらない。日本の労働運動も世界の仲間と共に新たなステージへと組織を変貌させていかなければならない。

JCMは建設的な労使関係を構築するための労使セミナーを国内外で開催したり、アジアを中心とした国際連帯と情報交換の連絡会議を設けたりして、徐々にその成果も現れている。本年1月にはタイで第2回労使ワークショップを開催したが、建設的な労使関係構築を話し合うと同時に、タイの労働組合リーダー育成にも寄与すべく努力している。ILOのフィラデルフィア宣言は、①労働は商品ではない、②表現及び結社の自由は不断の進歩のために欠く事が出来ない、③一部の貧困は全体の繁栄にとって危険である、と謳っている。日本の企業もグローバル競争に勝ち抜くことはもちろんであるが、「人類の安全安心と豊かさの向上に貢献する」という高い志を持ち続けることが労使の課題であると思う。



2014年1月開催のタイ労使ワークショップ。労使130名の参加のもと活発な論議が。講演資料はタイ語に翻訳し現地労組に提供、リーダー育成のセミナー資料として活用している。